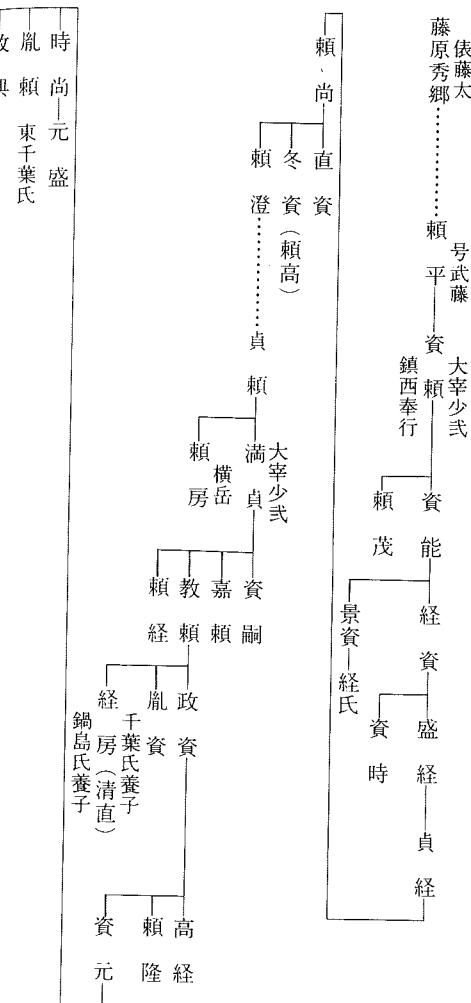


の高木氏以下の御家人とともにこれに応じ、元弘三年（一三三三）五月、鎮西架題文路に加わつた。

かくして幕府は亡ひ、全国的に諸探題も陥れられ、天下は統一された。

ここで建武中興が成り 後醍醐天皇は京都に還幸、因縁深い諸社寺の所領を安堵された。これは、所領であることを確認して、これに保証を与えたのである。肥前では、佐賀郡春日の高城寺を勅願寺とし、又その寺領を安堵した。すなわち、『高城寺文書』によれば、建武元年（一三三四）十一月十二日付で、内大臣吉田定房の御教

少司馬略系図



書として、高城寺領の河副南北莊内極樂寺免田漆町五段、江上藥師堂免田壹町、河上仁王講免田五段（北方分）⁽²⁾、米津土居外旱渴荒野壹所（南方分）等、川副莊内の土地が所領として安堵されてい

しかし、やがて足利尊氏が謀反し、南北朝時代に入る。九州では太宰府にいた少弐氏をはじめ、豊後の守川氏、薩摩の島津氏などが尊氏側についた。肥前の豪族、龍造寺氏、高木氏、千葉氏なども、少弐氏との関係で北朝側についた。南朝側には肥後の菊池、阿蘇や松浦党があつて攻防をくり返した。尊氏が京都に入ると、諸寺とともに、高城寺の寺領知行地を復活させた。『高城寺文書』には、⁽³⁾

肥前国河副荘内極楽寺別当職兼免田等、同米津旱潟荒野等安堵事と、建武三年（一三三六）十一月十一日付で安堵状を与えていた。

尊氏は、九州探題に一色範氏を当てたが、少弐氏がこれを喜ばず、対抗したので、一色氏は京都に去った。

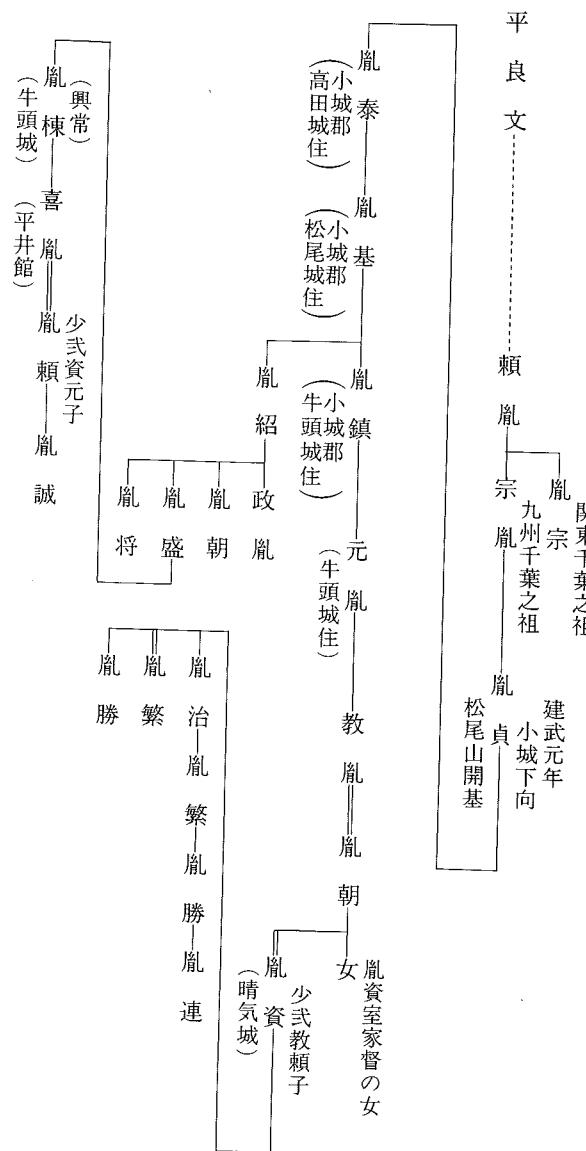
注(1)

六 室町時代の佐賀豪族

小城の千葉氏は下総平氏に属し、その後裔常胤が小城郡晴気荘地頭職として世襲した。六代の後、宗胤が肥前千葉氏となつた。その後、次第に勢力を伸ばし、長禄三年（一四五九）には、杵島郡長嶋荘に知行安堵し、その

千葉氏略系図(は養子) (佐賀市史第一巻参照)

(佐賀市史第一卷参照)



地域は小城、杵島、佐賀三郡にわたり、全盛を築いた。

の支族で、はじめ、三河幡豆郡今川荘に住んでいたが、今川範氏の弟貞世が、九州架道となつて、河副荘（佐賀郡東南部）を領していた。今川氏は足利氏

徳二年（一一七二）である。貞世は、後、入道今川了俊という。

松浦党の船で呼子に上陸、龍造寺家貞等に迎えられて、肥前領に入り、やがてここに土着するようになった。頼泰を改名した仲秋の子、国秋の母が千葉氏から出ていたので、肥前千葉氏と親しくなった。こうした関係で、今川氏は与賀莊、河副莊を領有するようになつた。国秋は輪尼李高の乱で、千葉胤基に属して、応永十一年（一四〇四）川上で戦死した。その子国治は、千葉胤鎮兄弟の争いで、永享十年（一四三八）子秋弘とともに川上で戦死した。秋弘の弟胤秋は与賀、河副両莊の地頭となつた。ここで千葉氏と対立し、寛正六年（一四六五）、応仁元年（一四六七）の二度にわたつて政防の撃戦を展開したが、利あらず敗死した。ここで、今川氏領の河副莊も千葉氏の勢力下に入ることとなつた。

応仁の乱（一四六七）後、九州探題の勢力は急激に衰え、戦国の状を呈するようになつた。文明元年（一四六九）、千葉氏は胤朝の代となり、その執権の反目からお家騒動がおこり、東西両派に分かれて抗争をつづけた。

文明二年、胤朝は、弟胤将の急襲にあい、殺害された。少弐政資はその後を見て、胤資を晴氣城に居らせた。

明応二年（一四九三）、少弐政資は、松浦党の伊万里山代氏が己れに服しないのを征伐したとき、高木氏、龍造寺氏が少弐氏に従つた。

一時、大内氏の内訌のために、少弐氏の勢力が強く、肥前にも及んでいたが、明応六年（一四九七）大内義興

が勢いを盛り返し、九州へ侵入をはじめる。その勢いは強く千葉氏は各地に敗れ、少弐政資は自殺し、千葉胤朝の子胤資も陣没した。ここで千葉興常が大内氏の勢威をかりて、肥前の守護代となつた。胤資の遺児胤治、

室尼日光、養子胤繁は、一時、小城の高田城に入つたが、翌明応七年、大内方の筑紫満門、東尚盛等の攻撃を受けて、戦い及ばず、川副郷太田に逃れて、旧縁の士のたすけを求めた。

援助を求められた龍造寺胤家は、自ら成富胤秀、木塚直喜ら、および太田和泉守、光増、石井、南里、鹿江、山領等の川副郷の武士とともに加わって出兵応援した。太田での戦いでは勝つたが、やがて形勢は不利となり、胤家は千葉胤繁とともに、一時、筑前に逃れた。

主要参考文献

「九州治乱記」 「肥陽軍記」 「隆信公御年譜」 「歴代鎮西志」 「佐賀郡誌」 「佐賀市史第一卷」

近世

一 川副地方と龍造寺隆信

(一) 隆信以前の龍造寺氏

戦国時代の争乱の中で、肥前を中心に筑後・筑前・豊後・肥後にまで進出し五州二島の大守と称され、島津・大友とならん九州を三分する勢力を示したのが龍造寺隆信である。

龍造寺氏は藤原氏の出と称する系図があるが、その出自は明かでない。ただ、龍造寺季喜すえよしが小津東郷の龍造寺村（佐賀市城内）あたりを開発した開発領主であり、これが彼の名にちなんで末吉名と呼ばれたと考えられる。

この末吉名は川副莊と隣接しており、この地を中心発展した龍造寺氏は川副地方と深いかかわりを持つていた。平安末から中世にかけて佐賀平野の土豪的存在として高木氏や国分氏とならん南部で成長し、肥前の龍造寺氏に発展して行くのである。蒙古襲来における龍造寺氏の動き、南北朝期における動向、今川了俊の九州探題としての下向によつて、九州の政治情勢が安定したことは前述の通りである。その後、渋川氏が九州探題となつたが